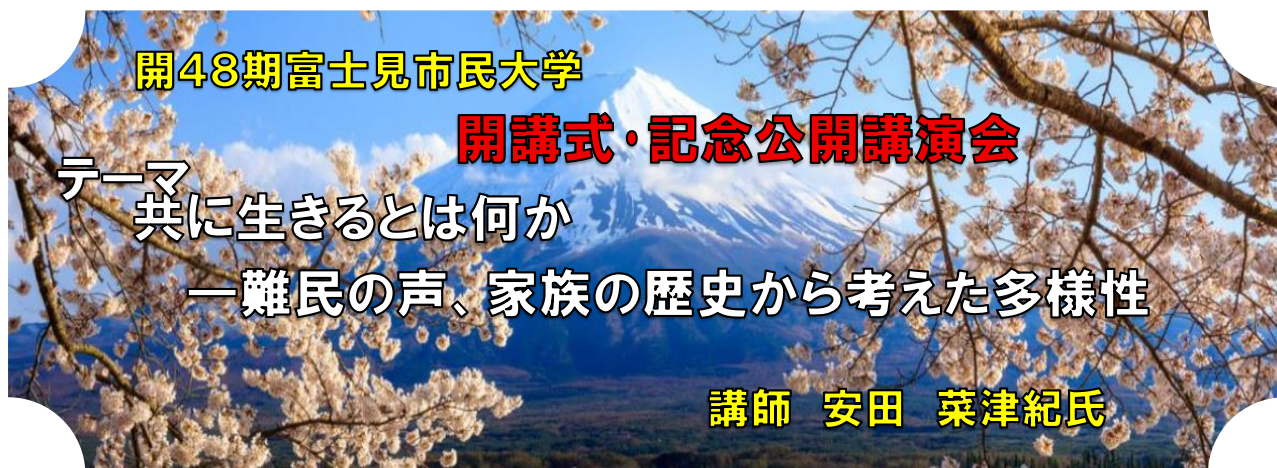




第48期富士見市民大学開講式・記念公開講演会

テーマ 共に生きるとは何か

—難民の声、家族の歴史から考えた多様性—

講師 認定NPO法人 Dialogue for People 副代表
／フォトジャーナリスト 安田 菜津紀氏

日時 6月7日（土） 開講式 13:00～
記念講演会 13:00～15:00

会場 鶴瀬コミュニティーセンターホール

参加者 88名



講師 安田菜津紀氏

司会の開会後、富士見市民大学理事長 安藤隆一より第48期市民大学が本日より開講した旨の挨拶とともに今期も多様な講座があるので受講してほしいと挨拶があった。

続いて来賓の富士見市教育委員会教育長の山口武士氏よりご挨拶をいただいた。市民大学が50年近く大学の歴史を刻んできたこと、理事・スタッフへの激励の言葉があった。その後、13時30分より公開講演会が講師のプロフィルの紹介後、開会された。



ご来賓 山口教育長

講義内容

講師からの参加者からの問いかけで「フォトジャーナリストが身近にいますか」
会場の雰囲気は???

フォトジャーナリストはどんな仕事・役割を担っているのか。写真を通して世界の人々の

生活をお伝えすることを誠実に果たすことに尽きるようです。全国紙からの依頼に応じて掲載用のコマをとる仕事とはだいぶ異なり大きなメディアに所属していないフォトジャーナリストと自己紹介がありました。

1. ガザの子どもたち、ガザの漁師の写真、美しい海が広がっているのにイスラエルによって囲われて遠くに漁に行けない状況、ガザの人口密度は非常に過密化している。封鎖下のガザを「天井のない監獄」とガザを称する人がいる。

そして、ガザの失業率が50%、若者の失業率は70%だったと聞き、未来が描けない世界に住まわされているといえる。

ガザの写真で、子どもが一人立っている骨組みだけのがらんだりの大きな建物の写真。もとは野菜市場だったと説明があった。2014年の爆撃後、再建することが叶わなかった。

ガザの子どもたちの写真。手紙を書いている、凧揚げをしている子ども、見ている高齢者を含めた大人たち。東日本大震災から一日も早く復興できるように祈りを込めてくれた沢山の色とりどりに形の違う凧が美しい。

2. 「シリアに行ったことがある人は」の問いかけに参加者のお一人が挙手。

シルクロードによって伝わった寄木細工が箱根でつくられている。先生のピアスも、寄木細工の伝統を絶やさないよう作り続けているシリア人が手がけたもの。

3. 無造作にある不発弾の側に穴の開いた壁から子どもの笑顔が覗いている写真。そして戦場ではなかったころの写真。対照的な穏やかな様子の写真。「パレスチナ、シリアは私たちの社会と地続きです」



4. シリアのアサド政権の弾圧から逃れ、日本にたどり着いた埼玉県在住の男性の写真。前段で、日本の難民認定について、2024年は190人うち102人がアフガニスタンからの日本大使館関係者として認められた人たち、88人がその他の対象者。同年カナダは46,480人の難民認定者数。この大きな差はどういうわけか。

シリア人の彼には日本で生まれた娘がいる。日本では国籍が認められず、無国籍児になっている。

5. 安田先生のご家族の写真。生い立ちやお父さんに対する複雑な思いをお話しされる。お父さんの穏やかな笑顔が印象的。

6. 在特会の路上デモ、在日朝鮮学校校門前でのヘイトスピーチ、神奈川県川崎市のふれあい館、ハルモニがキムチ作りの出張授業で子どもに笑いかけている写真など。2016年ヘイトスピーチ解消法は罰則規定のない理念法。2019年ヘイトスピーチ禁止条例が川崎市議会では全会一致で可決された。しかし、今でも当時のヘイトスピーチの様子が、SNS上で拡散されたりしている。身近な差別の放置は、戦争につながりかねない。イスラエル人のガザのパレスチナ人に対する差別感について。

7. 東日本大震災の時、福島県大熊町で父親、妻を亡くされ、子どもさんが行方不明になった木村紀夫さん。木村さんが6年間、必死の搜索をされてきた。そして複雑な思いを持ちながら6年後、重機を使いようやく発見した娘の遺骨の写真。そして2023年11月18日、東北の復興の願いからガザで凧揚げをし続けてくれた子どもたちに呼応するように木村さんの御尽力で、大熊町でも凧揚げがされました。

大空を舞う凧の写真に込められた思いがガザの子どもたちに届いてくれればよいのですが。安田先生の切なる願いのようでした。

不条理なこの世界で私たちに何ができるのか。個々の力は小さくとも諦めず声を上げ続ける、日本のわたしたちにはまだ自由な環境がある。結びに、貴重な写真から参加者を力づけてくれたように感じました。

